



★歌のメモリー 回想五十首選
「辺見じゅん」

選・文 三枝昂之 (「りとむ」発行人)

Takayuki Saigusa

われは埴輪の目となり街へ降りゆくをおりおりパスカルの妻思いつつ

『雪の座』

この国の敗れたる日の歎きのみとどめて父の歌のわかれよ

アキアカネ雑草あらくさのうえ越えゆきて見えなくなりし赤き飛行隊

おりおりは古志の訛をわらいたるおんな教師とベニヤ板の校舎

眸のみ笑わぬ写真は少女期のわが欺きを捉えいたりき

天折は美しき嘘 万緑の闇のなかより声の顕ちくる

学問を事業にかえてかの焦土一兵卒の父の歳月

喉こぼとけことりと落ちて逝きたまう昼サイレンの鳴りいずるかな

四つんばいに天をみるかな天ちかき村と呼ばれてつづく焼畑

遠山にきれぎれの虹つなぎつつわが父の座に雪は降りつむ

親不知おやしらずに歌といふ村ねむりたり目覚めて命の斜面を登る

『水祭りの栈橋』

きれぎれの夢のなかよりあらはれてほればれたのし父のどぶろく

父逝きて三とせの春を訪ひくるは胸の地藏会卯の花ざかり

はるばると琴になる木となれぬ木といづれさびしき海の音聞く

「へんみ・じゅん」 一九三九年富山市生まれ。父は角川書店創業者角川源義。短歌文芸誌「弦」主宰。幻戯書房設立、社長。「男たちの大和」「収容所から来た遺書」などノンフィクション作家としての業績も顕著。二〇一一年逝去。

いづかたの春のくれなるそのむかし男は女のために死せりき

馬兵にて夏の焦土に帰り来し父のうたへり大和うるはし

アパートの鍵月光に捜しつつ樟の若葉の瞬きに逢ふ

炎天の野の駅はるかパナマ帽／若き父なれ清きまぼろし

海やまの見えざる町に棲みつきて／寒の椿に声をかけたなり

子を負ひし埴輪の母よあすの日は／明日のことにて／われの眠らむ

売られゆく臼のうへにも粉雪の／舞ひてしづかに桑取の谷

みんなみのニューブリテン島の螢の樹／遺書に記して二十一歳なりき

とほき日の／母が帯解く音きこゆ／北陸本線みぞれ降りをり

冬ばれの檜山杉山夜を越えて／雪ふる里に仏欠けたり

産土は裏の日本よしろがねの／呉羽丘陵冬の虹たつ

ほろほろと立山曼陀羅おもふとき／都市の夜明けを山鳩啼けり

めつむれば水の国なるふるさとにみづがねいろの常願寺川

土臭き雨の降りきておほちちの天秤棒の明治古りたり

しろがねの海一枚よ簡明に生きよとわれを喚ぶ声ありぬ

海鳴りは人恋ふるかな古志といふまぶしき山河われの故郷

おとうとの柿の木 姉の柿の木よ 雪くる前の背戸の夕ぐも

八月はいづこ 南の島より兵士の手紙「必ず、帰ります」

【闇の祝祭】

歌集以外の辺見さんの仕事で近く思い出すのは「天下弘 虹の生涯」である。少年時代の私は西鉄ライオンズと天下弘のファンだった。天下は優しそうな顔で虹のように派手なホームランを飛ばす。それがまぶしかった。だから本が出た時にすぐに買った。こういう時のときめきは本ならではものだろう。

五十六歳で他界した天下の死因は新聞発表では心筋梗塞だがそれは表面向き、実は睡眠薬による自死だったと辺見さんは終章で教えている。そのくだりを含め、天下の人生を克明にたどって感動的なこの一冊は、辺見さんの粘り強い取材力をも示している。その行動力がノンフィクションジャンルの多くの賞に輝いた昭和の大戦に関する著書をも生んだ。

辺見さんは会うといつも笑顔でさまざまなことを教えてくれたが、人を惹きつけるその明るさが、心中深く沈めてきた戦時体験を人々から引きだしたのだろう。

歌人としての辺見さんの中心的な主題は父と戦死者だった。そしてそれは深く繋がっていった。最後の歌集となった「天涯の紺」の次の歌が

卯月七日声なきものこのゑとして櫻咲くなり町の水辺に

鬱金櫻のさみどりおほふ木の下にわれを呼ぶこゑ父のこゑなり

かひなどはさびしき入江秋来れば補陀落の舟かき抱くかな

ほのぼのと人恋ふ心めざめりて青磁の耳に秋立ちにけり

歳月を過ぎし人かげ清らなれ芹摘みに来て鶴となりゆく

パイヤをちちうりの木と呼びしかな兵士のがみ南島の遺書

他界とのあはひに座してまどろめば机のほとりの文鎮かほちや

判断に迷へるときは負の側に立てよと父の声からびたり

戦友を死なしめてなんの命よと死に近き夜の眩きやまず

むし蝶上手に食べし母なるを旅の夕べの卓に思ひつ

生くるにはほどよき日和と縁側に葛まんぢゆうを母と食みし日

家霊祀るは長女のわれよ秋草の盆灯籠へ灯を招きあつ

ほろ酔ひの母のうたふは手鞠歌ここのつと冬深みゆく

惚けたる父見ざりしは至福とも夕日くづして真鴨羽ばたく

風に乗りゆつさゆつさとさるすべり一銭五厘の叔父は帰らず

蛍にも神にもなれず戦ひに死にし者らを斑猫の飛ぶ

海底の戦艦大和よ 飽食のNIPPONの空黄砂降りつむ

コルトレーンきく夜の底木枯しのいちばん吹けり木枯しの世に

【秘色】

【天涯の紺】

そのことをよく教えている。

・戦友を死なしめてなんの命よと死に近き夜の眩きやまず

一兵卒として帰還した角川は歌と学問に別れ、出版を通して国文学の復興に生きた。なにが父をそうした道を選ばせたのか。その問いが「戦友を死なしめてなんの命よ」と眩きながら昭和五十年に世を去った父とその戦友の死へ、そしておびたしい無名の死を問う仕事へと辺見さんを赴かせた。そうした大切な成果の果てに辺見さんが洩らした「コルトレーンきく夜の底木枯しのいちばん吹けり木枯しの世に」が切ない。

最後にお会いした時、「もう在庫が殆どないからあなたに送るよ」と告げ数日後に届いたのが、自ら創業した幻戯書房の大部の三冊本「鷗外の遺産」だった。文芸への広い視野の中で短歌の魅力を考えて欲しいという、辺見さんの私への宿題だったのだろう。大切に受け止めた。